



Title	20世紀演奏史研究への解析的アプローチ：ベートーヴェン交響曲第8番を例として
Author(s)	荒川, 恵子
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3143712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	あら かわ けい こ 荒 川 恵 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 3 5 9 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成10年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	20世紀演奏史研究への解析的アプローチ —ベートーヴェン交響曲第8番を例として—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山 口 修 (副査) 教 授 神 林 恒 道 教 授 中 村 元 保

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、従来の西洋音楽研究において等閑視されてきた演奏を正面からとりあげ、人文・自然科学の双方に関わる分析方法により演奏様式を歴史的に把握するために、機器類を活用した研究である。1990年代に展開を見せ始めた先行研究の場合と同様、本論文でも解析が比較的容易なテンポを扱うのが中心ではあるが、デュナーミク解析をも組み込むことで演奏様式をより多角的に把握する方向が示される。対象としては、ベートーヴェンの交響曲第8番第1楽章呈示部(冒頭～第103小節)に絞り込み、61の演奏例が選ばれる。軽妙洒脱な中期の傑作を選曲することで、指揮者がこの曲に付加価値として表現するであろう「ベートーヴェンらしさ」が奇数番の交響曲よりも明瞭に演奏から読みとれるに違いないからである。

第1章「20世紀前半の演奏様式の検証」によると、ヴァインガルトナー(1927)の演奏では、二つの拮抗する主題、推移部、終止部などの区分が明確にテンポおよびデュナーミクのコントラストによって性格づけられていること、メンゲルベルク(1938)の演奏ではそのコントラストがきわめて大きいこと、ヴァルター(1942)の演奏では平板化の兆しが見えること、フルトヴェングラー(1948, 1953, 1954)の場合にはコントラストの大きさが演奏ごとに若干変化することが判明した。第2章「20世紀演奏史における第1次パラダイムシフト」では、フルトヴェングラーの対極にあるとされるトスカニーニ(1952)の演奏を分析し、「楽譜に忠実な werktreu」という演奏観が一般に彼に帰せられていることがむしろ逆であるという結論が導き出される。また、カラヤン(1962, 1984～1985)、シュミット＝イッセルシュテット(1968)、セル(1961)らの演奏様式が「軽やかなベートーヴェン」を聴衆に印象づける点で、ロマン的な色合いを払拭し、20世紀前半のものとは断絶することが指摘される。第3章「20世紀演奏史における第2次パラダイムシフト」では、1980年代に台頭する「オリジナル楽器」による演奏がとりあげられ、アーノクール(1990)の例を分析した結果、モダン楽器とは異なる旋律の分節化や、テンポとデュナーミクの局所的な変動が見られるので、伝統的なソナタ形式の構造を解体するものであると指摘する。しかし、この演奏様式は、単に「歴史的には厳密な博物館的な演奏」ではなく、現代人の肉体に語りかけ影響を及ぼすものとして支持を享受している。第4章では、こうしたアプローチによる研究が社会的に意義のあることを強調して論を結んでいる。

(分量 145頁, 400字詰原稿用紙換算約580枚)

論文審査の結果の要旨

従来の音楽学は、西洋世界における書伝情報をベースにした音楽史学を一方の極に置き、いわゆる第三世界で口伝情報を探るべくフィールドワークを中心にした民族音楽学を他方の極に置いて、バランスの悪いかたちをとってきたと言わざるを得ない。その意味で、主として演奏およびその録音を扱ってきた民族音楽学からの直接的、間接的影響を受けつつ、西洋音楽における「演奏」という問題領域に取り組んだ果敢な姿勢が本論文の最大の長所である。第二に、本論文において明快に提唱され、しかも具体的な方法と事例で示された学際的なアプローチが、総合大学での音楽学のあり方のひとつを生き生きと見せていることも歓迎されるべき事柄である。第三に特筆すべきことは、象牙の塔にこもった研究ではなく、研究成果を社会一般に還元することを強く意識して、現代の音楽文化の変貌ぶりに敏感に反応を示していること、また、近現代文化史を眺望するために役立てるべく、音楽の領域から具体的なデータを提供しようと努力していることである。20世紀を語るうえで欠かすことのできない「録音録画技術と人類文化の関係」という現代的な課題の追究のために、本論文が大きな貢献をはたすことができるであろう。

ただし、いくつかの短所も見受けられ、たとえば、分析対象が限定されているため、ややスタイルの異なる楽曲の演奏の場合にはどのような解析結果が得られるのか予測がつきにくい。また、演奏のスタイルを決定する要素として、テンポとデュナーミク以外の側面があることを指摘してはいるものの、それらを包含した総合的な様式理解の方向が示されているとは言えない。さらに、テンポとデュナーミクについて言えば、小節単位までの分析までしかなされていないので、拍と拍のあいだに頻繁に観察されるはずのテンポとデュナーミクの変化が演奏様式の確立に影響する蓋然性が無視されていると言わざるを得ない。しかしながら、これらの短所は、利用する機器類の発展をにらみ合わせながら経験を積むプロセスで補われてゆくべき性質のものであり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。

本論文は音楽演奏を解析的に把握する研究として従来の研究の水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。